

# Art students and Kyoto city zoo -about the graduation work of Kyoto city School of Arts and Crafts-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松井, 菜摘, Matsui, Natsumi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15014/00000197">https://doi.org/10.15014/00000197</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 画学生と動物園

## —京都市立美術工芸学校卒業作品について—

松井 菜摘

### 【抄録】

本学に明治 27 年 (1894) から受入れがされている卒業作品は、一部の著名な作家をのぞけば限られた情報しか遺されていない場合が多い。明治 37, 38 年 (1904, 05) 頃から動物・花鳥を主題とする卒業作品が増える傾向にあったが、その理由を先行研究で確認した。それには、明治 36 年 (1903) の京都市記念動物園 (現京都市動物園) 開園が大きく関わっていた。現在、京都市動物園には開園以降に撮影された園内風景や動物の写真、絵葉書、映像、動物園が発行した案内誌等の資料が保管されており、それらと卒業作品を比較、考察をした。学生たちは、当時見られた動物をただ描くだけでなく、構成に工夫をこらし、動物の生命力をも表現していた。動物園の開園により、安全に写生ができ制作を行えることの教育的な意義や、同じ明治という時代に始まった本学と動物園の歴史的結びつきも再認識できる。

---

## 1. はじめに

本学の卒業作品受け入れの歴史は、明治 27 年 (1894) の京都市美術学校工芸図案科作品、翌年の京都市美術工芸学校 (注 1) 絵画科作品から始まる。一時期には、卒業生全員の作品を遺したこともあったが、基本的には選択して購入され、現在でも受け入れは継続されている。しかしこれらの卒業作品は、制作の過程を示す写生や周辺資料等が乏しく、また卒業作品しか遺されていない画家もあり、作品に関する情報が限られている場合が多い。

廣田孝氏は『竹内栖鳳 近代日本画の源流』(思文閣出版、平成 12 年 (2000)) において、絵画科作品の受け入れが始まった明治 28 年 (1895) の美術工芸学校第 1 期卒業作品から大正 4 年 (1915) の京都市立美術工芸学校卒業作品までの 20 年間の画題の変遷について分析している (注 2)。明治 37 年 (1904) から 38 年 (1905) を境に宗教・説話・有職故実・歴史を画題とする作品が少なくなる一方、動物・花鳥の作品が増加すると指摘し、またこれは、教員を務めていた竹内栖鳳が 1900 年パリ万博視察を目的とした欧州出張から帰国した明治 34 年 (1901) 以降、写生重視の教育方針を打ち出したことに起因すると論じた。動物や花鳥は、写生を活かせる即物的対象であることがその要因と考えられるが、写生をするならば人物等他のモチーフでも可能なはずであり、動物・花鳥に集中したのは何故で

あろうか。

ここで注目したいのは、明治36年(1903)の京都市記念動物園(現・京都市動物園)開園である。大熊敏之氏が「近代日本の画家にとって、動物園とは何だったのか」(注3)でも指摘しているように、明治30年7月の『京都美術協会雑誌』で植物園及び動物園の設立を求める論説(注4)が掲載され、京都の画家たちの動物園設立への期待は高まっていた。その後、動物園の設立は明治33年5月10日に当時の皇太子(大正天皇)の御成婚を記念して決まったが、翌年の栖鳳帰国、写生重視の絵画教育の転換、動物園開園への一連の動きをみると、動物の写生が教育に取り入れられ、卒業作品のモチーフになるのは自然な流れに思われる。

では動物園開園によって、動物・花鳥を描いた卒業作品にはどのような変化が起きたのだろうか。本稿では、それらが集中して描かれた明治39年(1906)から大正10年(1921)の京都市立美術工芸学校卒業作品(表)を中心に見ていく。作品数の増加だけでなく、描かれた動物の種類や表現方法について考察する。その際、当時の動物の飼育状況や写真資料等を交えることが有効である。現在、京都市動物園には開園以降に撮影された園内風景や動物の写真、絵葉書、映像、文献などが所蔵されている(注5)。学生たちが訪れたその時代を切り取った資料の数々は、作品には描かれない周辺情報を伝え、また制作の背景を知る上で貴重である。

## 2. 卒業作品に描かれた動物たち

当館収蔵品のうち、最も早く動物を描いた卒業作品は、明治30年(1897)中西芦汀の《遊糸図》である。白い桃花の木影で休む猫の母子を描いている。翌31年(1898)から36年(1903)までは58点中5点の動物・花鳥画が収蔵されたが、鹿、キツネ、鶏などのモチーフが選ばれている。明治37年(1904)から38年(1905)にかけては12点中4点、11点中6点と増加傾向にあったが、やはりモチーフは鹿、馬、猪、鶉、鴛鴦等、日本絵画においては決して珍しくないものが描かれている。

大きな変化が見られるようになるのは、明治39年(1906)からである。明治の末年まで卒業作品における動物・花鳥の割合が10割に達し、また動物園での写生を元に描かれたであろうモチーフが登場し始める。明治39年(1906)角田水哉《熊》【1】、明治40年(1907)村上華岳《罨》【2】、明治44年(1911)大村廣陽《水牛》【3】、明治45年(1912)三宅鳳白《もくれん》【4】等である。

角田水哉《熊》や村上華岳《罨》の描いたクマは、細やかな毛描き、立体感のある鼻元など、実物写生を活かしたことがうかがわれる。明治38年(1905)の『京都市記念動物園案内』(注6)によれば、第2号室に日本熊、第27号室に月輪熊とアカグマが飼育されていたため、角田も村上も実物のクマを見ることができたであろう。どちらのクマも、飼育室に入れられた姿【5】ではなく、草むらをかき分け姿を現した様子が描かれている。ごわごわとした毛並みで覆われた身体は全貌は分からないが、がっしりとした体格を想像させる。

明治42年(1909)には京都市立美術工芸学校の上級教育機関として絵画専門学校が創立し、同44年(1911)から同校の卒業作品も受け入れが始まった。しかし動物・花鳥をモチーフとする卒業作品は、その後も美術工芸学校を中心に遺された(注7)。

大村廣陽《水牛》は、悠然と沐浴をする3頭の水牛の周りを白鳥とアヒルが遊んでいる。水牛と白鳥・アヒルは黒と白、大と小という対比が際立っている。生息地の異なる動物が共に泳ぐ情景には、桃源郷のような穏やかさが漂う。水牛は牛舎、白鳥とアヒルは水禽室【6】と、別々の飼育環境にあったが、水牛は園内の噴水池に連れてきて泳がせていた(注8)【7】といい、画家はそれぞれを写生して作品の中で組み合わせた。

三宅鳳白《もくれん》は、満開のモクレンの下に4羽のシチメンチョウが描かれている。3扇目に雄、5、6扇目に雌3羽がおり、雄はディスプレイと呼ばれる尾羽を広げて体を膨らませる繁殖行動をしている。シチメンチョウは北アメリカ原産で、日本には明治以降にもたらされた。明治38年(1905)の『京都市記念動物園案内』では、第31号室の「からくんでう(吐綬鶏) The Turkey. 「しちめんてう」とも云ふ」(注9)と紹介されている。シチメンチョウは非常に異国の趣き強いモチーフではあるが、そこにモクレンの清廉さが加わることで、モダンな印象の花鳥画となっている。

大正時代からは、大正10年(1921)までをピークにさかんに動物・花鳥が描かれ、翌11年(1922)以降は激減した。明治39年から大正10年までの間で9割近くが動物・花鳥であったのに対し、翌年から昭和17年までの間(注10)では2割あまりになっている。かわって風景画の数が増加しているが、この要因については別稿で論じたい。大正10年(1921)までの卒業作品のうち、動物園で見られたモチーフは、クジャク、サル、ラクダ、ヒツジ、ヒョウ、ライオン等がある。

大正2年(1913)の中山正《猿》【8】は、ニホンザルとオナガザルの2種類の猿が戯れる様子を描いている。当時、猿雑居室ではこの2種類が飼育され、人気を集めていた(注11)【9】。中山は、せわしなく動く異種の猿の姿をユーモラスにとらえている。この作品だけを見ると異種の猿が戯れるのは創作のようにも思えるが、開園当初から実際に見られた光景である。背景の描写は省略され、特にオナガザルは宙に浮いたようなポーズを取っており、やや違和感がある。しかし猿雑居室の写真にある木の枝ぶりをその背景に補うと、枝上を器用に動き回る様が浮かぶ。

同じく大正2年(1913)高田文也の《粧》【10】は、マクジャクが屏風の2扇目から5扇目にかけて華麗な尾羽を大きく広げている。6扇目には頭から頸が濃青色のインドクジャクが描かれているが、こちらも当時同じ孔雀室で飼育されていた(注12)。

大正5年(1916)横田元太郎《曠野》【11】は、琳派を思わせる流水に3頭のヒトコブラクダを描いている。ヒトコブラクダはうっとりとした表情を浮かべ、水辺に憩うようである。顔の周りや背中に用いられたたらし込みによって、背景の流水にヒトコブラクダが調和し幻想的な雰囲気醸し出している。ヒトコブラクダは、明治42年(1909)に第2代園長・六浦徹矢がドイツで買い入れ、飼育が始まった(注13)【12】。

大正6年(1917)井上永悠《綿羊》【13】は、7匹の綿羊を左上から右下へ視線が流れるように配置している。墨を基調とした抑制された色彩で描き、毛並みには筆の側面を使いごわごわとした質感を表現している。動物園での飼育【14】は、明治38年(1905)から始まった(注14)。

同じく大正6年(1917)稲垣伸静《豹》【15】は、異なる3態のヒョウを描いている。立ち止まるもの、歩き出すもの、頭を低くし様子を伺うものを異時同図的に配置し、実際にヒョウを目の前にしたような緊張感を鑑賞者に抱かせる。ヒョウの飼育記録は明治38年にはすでに見られる(注15)が、本作の翌年に発行された『京都市記念動物園一覽』(注16)には、ヒョウの収容数は「一」とある。左耳の下あたりの柄などに多少違いはあるものの、3態はおそらく1頭のヒョウの異なるポーズを画中に描いている【16】。

大正9年(1920)吉村真慈《牝獅子と其児》【17】は、ライオンの母仔が寄り添い安らぐ様子を描いている。ライオンの筋肉質な体軀や爪、顔つきなどは丁寧に描かれ、愛らしさの中にも百獣の王の風格がある。動物園では、明治39年からライオンの飼育が始まり、43年には国内初の繁殖に成功、人工哺育も行われた(注17)【18】。その後も毎年のようにライオンの出産は続き、動物園が発行した絵葉書にもたびたびライオンの母仔は登場している。【19】

以上のように、動物・花鳥が集中して描かれた明治39年(1906)から大正10年(1921)頃までの卒業作品を見てきた。動物園開園と時代を同じくして写生重視の教育方針に変わり、学生たちは動物

たちの姿をつかもうと写生に打ち込んだ。その成果は実直に作品として表されているが、写生をそのまま作品にするのではなく、絵画として成立しうる表現を学生たちも工夫している。角田や村上は、草むらを分け入り野山に逞しく生きるクマを描き、大村は異なる飼育環境にいた鳥を画中で組み合わせ、水牛の悠然とした姿を表現した。三宅は咲き乱れるモクレンの下、シチメンチョウの求愛の様子を、横田は、琳派を思わせる流水に溶け込むようにうっとりとした表情を浮かべるラクダを描いた。一方で、背景や周囲の描写をせずに主たる動物のみで構成する作品は、鑑賞者の視線をメインモチーフにしぼらせている。中山は奔放に動くオナガザルと仲間に寄り添うニホンザルの対比を明確にし、井上は少しずつポーズを変えジグザグに配置した羊を映えるようにしている。稲垣のヒョウや吉村のライオンも同様であり、動物の肉体の逞しさや野生味、生命の力強さが強く感じられる。

本稿では、特に動物園開園によって直接見ることが可能となった動物の作品に注目してきた。しかしそのような珍しい動物だけでなく、日本に元々生息する動物を描いている卒業作品もある。開園 3 年後の明治 39 年には、角田の《熊》をはじめとする買上げとなった卒業作品全てが動物・花鳥をモチーフとしているが、《熊》以外の作品に登場する動物たち一酒井耕月《鹿》、星野空外《狸》、宮崎抜天《狐》等も同時期に動物園で飼育されている（注 18）。これらの動物は、他の環境で写生することもできたかもしれないが、動物園が身近な写生環境であったことを思えば、園での写生を活かしているだろう。また翌年の村上華岳の代も、入江頼米《狐》や芝池藤一郎《孔雀》、井上芳次《鶴》など同様のことが言える。動物の種類に限らず、学生たちが集中して写生に励める環境が整ったことは、本学の教育にとって意義深いものであったことが分かる。

### 3. 動物園の風景

動物園に遺された写真や文献資料と照らし合わせ、作品に描かれた動物たちが同時期に園で飼育されていたことを確認した。飼育室の様子等も写真には写されており、学生がどのような状態の動物を写生していたかも分かった。またこれらの資料からは、当時の動物園の風景も見ることができ、学生たちが訪れた園の雰囲気を感じ取れる。ここでは明治 40 年（1907）頃の 4 点の写真を紹介する。

《動物園正門前のにぎわい》【20】は、西洋風の石門に造りかえられた正門前の人々の様子を写している。和装の人々が多い中で、帽子にステッキ、スーツ姿の男性や洋装の制服を着た子どもたちも見られる。

《噴水》【21】の中央にある噴水池は、開園当初から園内西側中央にあり、池中央の岩組は現在も遺されている。琵琶湖疏水の水を引き入れ、動力を用いず琵琶湖の水面との高低差を利用し噴水する。右手にある橋の石柱は、かつて六条通（六条商店街魚棚通）の西洞院川にあった橋の親柱だった。「西洞院」と「魚店通（魚棚通）」の文字が刻まれている。明治 37 年（1904）に開通した市電の整備で撤去され、動物園に移された（注 19）。現在でも動物園内京都の森エリアの入口にかかる橋に設置されている。

《象使いと仔象》【22】には、明治 40 年にシャム（現タイ）公使に依頼し来園したアジアゾウと外国人調教師が写る。京都市動物園におけるゾウの飼育はここから始まった。しかし、明治 44 年（1911）の『京都市記念動物園案内』では、次のゾウの買入れの交渉中であることが記されており、この写真のゾウはわずかな期間で亡くなっていたようである（注 20）。

《園内風景》【23】には、花見を楽しむ人々の姿が見られる。かつては園内全域に桜が植えられ、現在よりもその数は多かった。明治 43 年（1910）からは毎年のように観桜会も行われ（注 21）、花見客も非常に多かった。

当時の施設の建造物や人々の装いは、かつての動物園の風景を物語る。学生たちが写生に出かけ、そこで感じた園内の空気やざわめき等も想像でき、彼らのまなごしを追体験するようだ。開園時に造られた噴水池や、京都のまちの記憶を伝える遺物等、現在も動物園内で見ることができるものもあり、当時の面影をわずかではあるが留めている。限られた情報しか遺されていない卒業作品を、多面的に理解する上で意義のある資料である。

#### 4. おわりに

明治 36 年の京都市記念動物園開園によって、伝統的な動物・花鳥画の世界に新しいモチーフが加わったのは言うまでもない。動物園という動物の観察に集中できる環境が整い、それまで古画や印刷物などを頼りにしか描くことができなかつた珍しい動物たちも、実物写生をもとに作品にできるようになった。絵画を学び始めた学生たちにもその環境は与えられ、写生の成果は卒業作品として遺された。動物園に遺された資料を元に卒業作品を見つめなおせば、制作にまつわる背景が分かり、学生や作品への理解も深まる。また、同じ明治という時代から歩みを始めた本学と動物園の歴史的な結びつきも再確認でき、本学の教育の歴史の中で動物園という施設の重要性がより明らかとなる。

注1 京都府画学校開校から京都市立芸術大学発足までの学校名の変遷は以下の通りである。

明治 13 年 (1880) 京都府画学校開校。

明治 22 年 (1889) 京都市画学校に改称。

明治 24 年 (1891) 京都市美術学校に改称。

明治 27 年 (1894) 京都市美術工芸学校に改称。

明治 34 年 (1901) 京都市立美術工芸学校に改称。

明治 42 年 (1909) 京都市立絵画専門学校開校。

昭和 20 年 (1945) 京都市立絵画専門学校を京都市立美術専門学校に改称。

昭和 25 年 (1950) 京都市立美術大学開学。

昭和 44 年 (1969) 京都市立芸術大学発足。

注2 廣田孝『竹内栖鳳 近代日本画の源流』思文閣出版 平成 12 年 (2000), pp. 183-197.

注3 大熊敏之「近代日本の画家にとって、動物園とは何だったのか」『特別展 画家たちの動物園』京都市動物園 平成 14 年 (2002)

注4 論説「植物園及動物園」『京都美術協会雑誌』第 61 号 京都美術協会事務所 明治 30 年 (1897) 7 月 9 日

注5 京都市動物園では、第 2 代園長・六浦徹矢旧蔵の明治 40 年頃に作成された写真帖や、明治から昭和にかけて撮影された写真を使用した絵葉書帖、昭和 2 年の納涼会や昭和 33 年の動物演芸の映像、明治 38 年から出版が始まった『京都市記念動物園案内』等が所蔵されている。

注6 『京都市記念動物園案内』京都市記念動物園 明治 38 年 (1905), p. 2 及び pp. 13-15.

注7 絵画専門学校卒業作品に見られる動物・花鳥は、明治 44 年 (1911) から終戦前最後の受け入れとなった昭和 18 年 (1943) までに遺された作品のうち 2 割あまりである。対して同期間の美術工芸学校の動物・花鳥の作品の割合は 4 割あまりである。

注8 京都市動物園編集委員会編『みんなの京都市動物園—京都市動物園 110 周年記念誌—』京都市動物園 平成 25 年, p. 13

- 注9 『京都市紀念動物園案内』京都市紀念動物園 明治 38 年 (1905), pp. 18-19.
- 注10 戦況の悪化と戦後の混乱のため, 昭和 18 年以降の美術工芸学校卒業作品は遺されていない。京都市立芸術大学百年史編纂委員会編『百年史 京都市立芸術大学』京都市立芸術大学 昭和 56 年 (1981), pp. 67-71.
- 注11 京都市動物園編集委員会編『みんなの京都市動物園－京都市動物園 110 周年記念誌－』京都市動物園 平成 25 年, p. 12
- 注12 『京都市紀念動物園一覧』京都市紀念動物園 大正 2 年 (1913)
- 注13 『京都市立紀念動物園一覧』京都市紀念動物園 昭和 6 年 (1931), p. 6
- 注14 『京都市紀念動物園案内』京都市紀念動物園 明治 38 年 (1905), p. 11
- 注15 『京都市紀念動物園案内』京都市紀念動物園 明治 38 年 (1905), p. 3
- 注16 『京都市紀念動物園一覧』京都市紀念動物園 大正 7 年 (1918), pp. 34-35.
- 注17 京都市動物園編集委員会編『みんなの京都市動物園－京都市動物園 110 周年記念誌－』京都市動物園 平成 25 年, p. 19 及び p. 50
- 注18 『京都市紀念動物園案内』京都市紀念動物園 明治 38 年 (1905), pp. 8-9, p. 13, p. 16, pp. 20-21
- 注19 京都市動物園内にある京都の森エリアの入口に設置された解説看板を参照。
- 注20 京都市動物園編集委員会編『みんなの京都市動物園－京都市動物園 110 周年記念誌－』京都市動物園 平成 25 年, p. 13
- 注21 『京都市紀念動物園一覧』京都市紀念動物園 昭和 6 年 (1931), p. 6

表

【京都市美術工芸学校】

明治 30 年 (1897)	中西芦汀 廣井十七吉	遊糸図 春風図	ネコ サギ
明治 33 年 (1900)	海老名長虹 星野石水	枯林蕭條 鹿	シカ シカ
明治 34 年 (1901)	有友鶴城 河本魏山	旧都月 熱風捲砂	キツネ ラクダ

【京都市立美術工芸学校】

明治 36 年 (1903)	水島笠村	春暖	ニワトリ
明治 37 年 (1904)	菅沼翠外 鈴木華陽 丹羽琢堂 榊原雨村	暁風残月 黄昏 春暖 野猪	シカ ウマ ネコ イノシシ
明治 38 年 (1905)	入江波光 岡本蕉雨 柴原魏象 不動立山 牧互秀 三戸万象	春雨 鶉 軍鶏 牛 鴛鴦 奔馬	キジ ウズラ シャモ ウシ オシドリ ウマ
明治 39 年 (1906)	江内春潮 酒井耕月 里村心城 角田水哉 竹内鳴鳳 平井樸仙 星野空外 牧皎堂 松宮芳年 渡辺与平	鷺 鹿 雉 熊 犬 角鷹 狸 鷺 狸	ワシ シカ キジ クマ イヌ タカ タヌキ ワシ タヌキ
明治 40 年 (1907)	山ノ内臥雲 入江頓米 岡本景涯 芝池藤一郎 井上香峰 松浦舞雪 榊原紫峰 二宮一鳩 村上華岳	狐 長尾鶏 狐 春溪 孔雀 鶴 兎 軍鶏 犢 罷	キツネ ニワトリ キツネ キジ クジャク ツル ウサギ シャモ 仔ウシ ヒグマ
明治 44 年 (1911)	大村廣陽	水牛	スイギュウ



明治 45 年 (1912)	川崎南風 川本参江 岡島徹州 佐野一星 三宅風白	青いリボン 猫 キンパラ ゆきぞら もくれん	ヤギ ネコ キンパラ トリ シチメンチョウ
大正 2 年 (1913)	松井富美也 土屋良夫 永井泰造 中山正 森対泉	粧 黙 霜の晨 猿	クジャク サル カラス サル
大正 3 年 (1914)	松山致芳	山羊	ヤギ
大正 4 年 (1915)	福田平八郎	真鶴	ツル
大正 5 年 (1916)	玉城末一  田村豊洲	雨後 幽遠 皐月の頃のささや き	トリ クジャク リス
大正 6 年 (1917)	前田荻邨 横田元太郎 井上永悠 稲垣仲静 大橋三峽 長谷川菊洲	銃響 曠野 綿羊 豹 あせびの花 五月雨の頃	シカ ラクダ ヒツジ ヒョウ シカ キツネ
大正 7 年 (1918)	井上常太郎 山本朋鋏	雪 水牛	クマ スイギュウ
大正 8 年 (1919)	岡崎万相 朽木成一	春 菩提樹の葉蔭	ツル シロクジャク
大正 9 年 (1920)	阿部由雄 清水六兵衛(六代) 徳力富吉郎	虎 鷲 牛	トラ ワシ ウシ
大正 10 年 (1921)	吉村真慈 井上通世 上村松篁 麻田辨自 驚海旺	牝獅子と其児 花鳥 春立つ頃 馬 豚	ライオン トリ チャボ ウマ ブタ
大正 12 年 (1923)	猪田青以	初秋	ウズラ
大正 15 年 (1926)	今井藤四郎 伴幸雄	凄寥 藤咲く頃	キツネ シカ
昭和 4 年 (1929)	林貞之助	獅子	ライオン
昭和 5 年 (1930)	川勝一止 沢田元幸	華鹿 春風	シカ ロバ
昭和 6 年 (1931)	幸野豊一 丸尾拳永	三月盡 徒然	ヤギ サル

昭和7年(1932)	渋谷和 松本伶司 山本昌平	冬となり 雪野 晴朝	サル イヌ ウサギ
昭和8年(1933)	福井源造 曲子光男	春日野の春 深秋	シカ キツネ
昭和9年(1934)	林正広 山中信夫	晴日 母子	ウシ ウシ
昭和11年(1936)	河戸一男 小西寿生 山村光雄	童心 東風 秋響	イヌ イヌ シカ
昭和15年(1940)	三宅篁治	牛舎	ウシ
昭和17年(1942)	松田行雄	ポプラ	ウシ

【1】



【2】



【3】



【4】



【5】



【6】





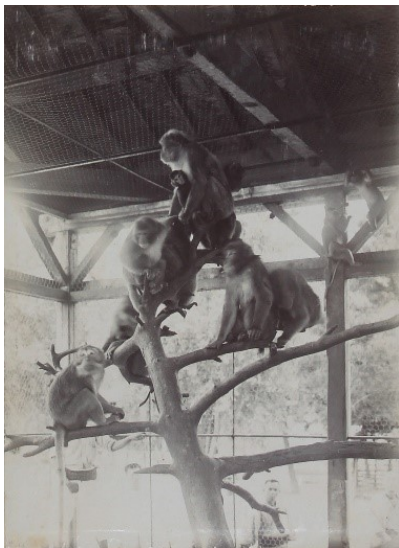
【7】



【8】



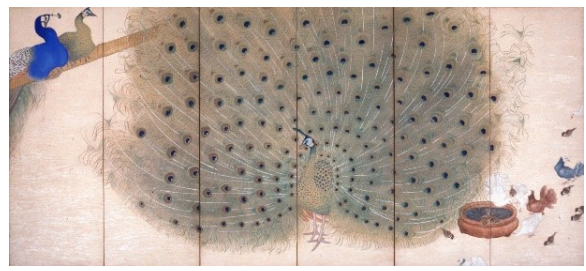
【9】 - 1



【9】 - 2 (猿雜居室外観)



【10】



【11】



【12】



【13】





【14】



【17】



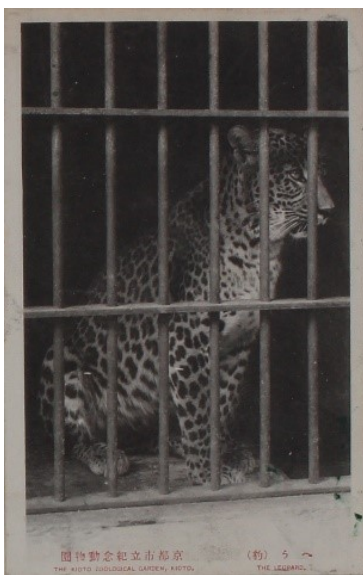
【15】



【18】



【16】



【19】



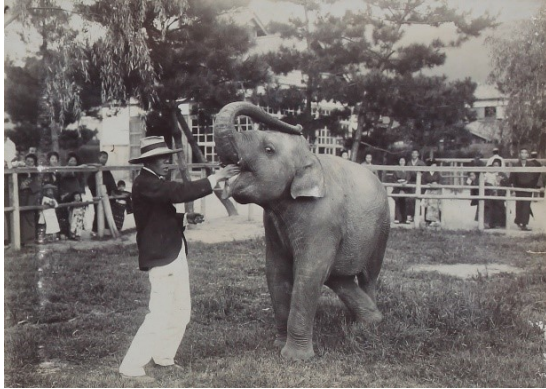
【20】



【21】



【22】



【23】

